

冒険者
寝取られ
体験談

しゅにく2

R-18
ADULT
ONLY



第 一 章
義 妹 と
お じ さま
ま 宿 屋 の
編



目覚めた私が部屋の窓から外を見ると、もう太陽が神殿の屋根より高く昇っていました。

寝起きのボケた頭で一瞬焦りましたが、今日は休みの日でした。

顔を洗おうと井戸へ向かう途中、神官長様に呼び止められます。

「昨日はご苦労じゃったなエマ。もうすっかり一人前の神官じゃ。アルサス殿も喜んでおられることじゃろう。今日はゆつくりと休むが良い。そうじゃ、丁度そのアルサス殿の手紙が届いておるんじやった」

そう言うって手渡された久しぶりの義兄様からの便り…。

足早に部屋に戻った私は、はやる気持ちを抑えながら手紙を開きます。

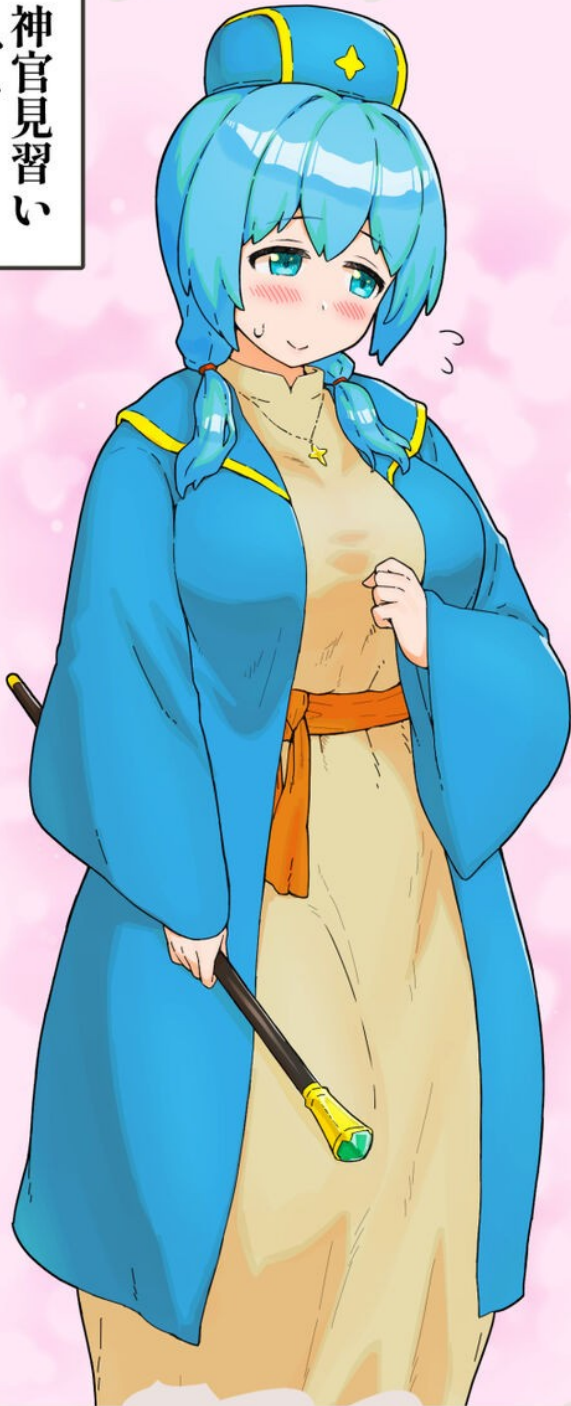
…相変わらず義兄様は、この地方を東奔西走しながら魔物を退治したりとご多忙の様子です。

でも、いまや高名な冒険者となった義兄様も、冒険者になりたての頃はとても苦労されていました。

不意に胸に甦る、ほろ苦くも甘酸っぱい記憶。

何を隠そうこの私も、当時は大好きな義兄様の隣で駆け出しの冒険者をやっていたのです…。

神官見習い
エマ



——私と義兄様は、地方の村をいくつも治めている様な有力者の一族の生まれです。小さい頃から義兄様は妾の子である私にも分け隔てなく接してくれました。私もそんな優しい義兄様になつき、いつも側にくっついていました。でも父様の死後、状況は一変します。叔父たちの争いや一族の揉め事……。追い出されるように義兄様と私は故郷を出ることになってしまつて……。でも当時は、そんな状況でも義兄様と一緒に旅に出るという事を、心の中で喜んでいる自分がいました。

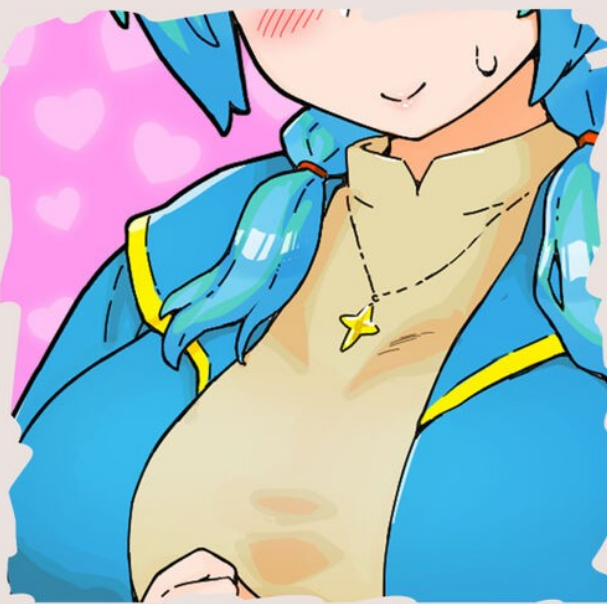
何もエマまで
ついてくることは
なかったのに…



戦士見習い
アルサス

義兄様は私が付いていく事に反対と
いうか心配をしている様子でした。
その時すでに義兄様は冒険者として
生計を立てると決心していたようです。
今思えば私が冒険者には向いていな
いと解っていたのかも知れませんが。
ただ、このままあの故郷の家に残っ
ていてもろくな扱いをされないであろ
うことは、二人ともよく解っていました。

ともかく私達は最寄りの冒険者ギ
ルドがある街へ行くことにしました。
その時の私は、初級の治癒呪文が
なんとか使えるだけの神官見習い未
満といったレベルで…。
それでも回復役としてだけではな
く心と体の両面で義兄様を支えられ
たらいいな等と、今まで抑えていた
気持ちがこの状況になって少しづつ
溢れだしていたのです。
もしかしたら旅の途中で義兄様と
そういう関係に…なんていう妄想
まで頭の中に浮かべながら。





拍子抜けするくらいに簡単に冒険者登録の手続きが終わり、私達は冒険者になりました。
といっても追いつき出されるように旅に出た私達に潤沢な資金などあるはずもなく、当分は馬小屋暮らしになるだろうと義兄様は言いました。
やはりお金のない新人冒険者は宿屋代を節約するためここを拠点にするのも珍しくなかつたそうです。

宿屋主人
デン



困っている新人冒険者さん達をサポートするのも

僕の役目だと思っ
ているからね
何かあれば相談に
のるよ

この、父に少し似た髭を生やした穏やかな顔つきのおじさまがデンさん。
私達がお世話になるこの宿屋の主人です。
ここから数々の名のある冒険者が巣立っていったのだと誇らしげに語ってくれました。
また、お金のない私達にたいしても色々とお応援したいと言ってくれて……。とても親切な人に見えました。
義兄様も私も、ひとまずの拠点を得てほっと胸をなで下ろした事を覚えています。

兎にも角にも冒険者になつた私達は、当座のお金を得るためにクエストを受けないことになりました。もう忘れてしまいました。だが、最初のクエストはたしかとにかく簡単なモノを探して受けたと思います。

そこからもう少し稼げる討伐系のクエストにいくのが定番でした。義兄様は昔から剣術を習っていて、近隣の村では誰も敵わないくらい腕なのです。

だから討伐クエストも大丈夫だと思っていたのですが……。



驚いて倒れた私の目の前を討伐目標の一角ウサギが一目散に飛び跳ねていくのを見ている事しかできませんでした。義兄様に勝てそうにないと悟つたその目敏い魔物は、弱そうなのに私の方をあっさり突破していつてしまったのです。結果的にクエストは失敗。

私のせいで魔物に逃げられてしまった……。

義兄様は全く怒らずむしろ私を心配してくれていました。

兄様はいつもそうです。どんな時も怒らず、私には常に優しくしてくれました。

当時はその優しさに応えるために何か役に立ちたいと焦る日々でした。

討伐クエストに失敗し、ロクに装備もお金も無いといった新人冒険者にとつての悪循環に陥ってしまった私達。
ある日、義兄様の不在時に宿屋のおじさまが馬小屋を訪ねてきました。
滞ってしまった宿代の催促に來られたのですが、当然払える筈もなく……。

アルサス君は
いないか……いや
申し訳ないけど

だいたい支払いが溜まっていてね
そろそろ……

なるほどねえ
今すぐ払うのは
中々厳しいと

困り顔でヒゲを撫でながらおじさまは、私の体に視線をむけます。
絡みつくようなそれは村の大人達からよく向けられていた視線と同じもの。
発育が早く小さい頃から村でからかわれる事も多く、そのたびに義兄様が守ってくれて……。
「僕も新人さん達をサポートしてあげたいからね。いいんだけども、まあやっぱり一応ね？」
父様の死後、ウチで引き取るといった時の親族とそっくりな笑みを浮かべたおじさまの口から出る言葉を予測するのは難しい事ではありませんでした。

仕方ないから
支払い伸ばして
あげても
いいんだけどね……？

おじさまの出した案件に少し悩んだ末に私は首を縦に振りました。普段とはまるで違う歪んだ笑みを浮かべたおじさまが、興奮した様子で私の胸を揉み始めます。今宿を追い出さたら義兄様も冒険者どころでは無くなってしまおうでしょう。義兄様の役に立てるのなら私は……。



ころんなけしからん胸で冒険するのは



さあ一緒に握るおじさんのかっぽか



……最初は触るだけという約束だった筈でしたがいつのまにか、下を脱いだおじさまに私の手を掴まれ勃起した男性器を無理やり握らされました。しばらく手を重ねたまま擦っているとおじさまは息を吐いて……。初めて見る男性の射精。勢いよく飛んだ精液が馬小屋の壁にべっとりとかかっていたのをよく覚えています。そして、その日はそこで終わったのですが……。

— 次の支払いの催促の時も当然、 そう
いう『条件』になり……。
すぐ目の前で宿屋のおじさまの男性器
が、見せつける様にみるみる大きくなっ
ていきました。
当時の私は、おじさまから「口で……」
と言われた時もすぐには理解ができず戸
惑うばかりで……。
そんな様子を見たおじさまはぶつぶつ
と呟きながら、私を馬小屋の壁際に座ら
せ目を閉じて口を開ける様に言いました。
そしてそのまま私の口の中に……。

ほくら♡
エマちゃんの
かわいいお口で

おじさんのち○ぽ
しゃぶってよ♡

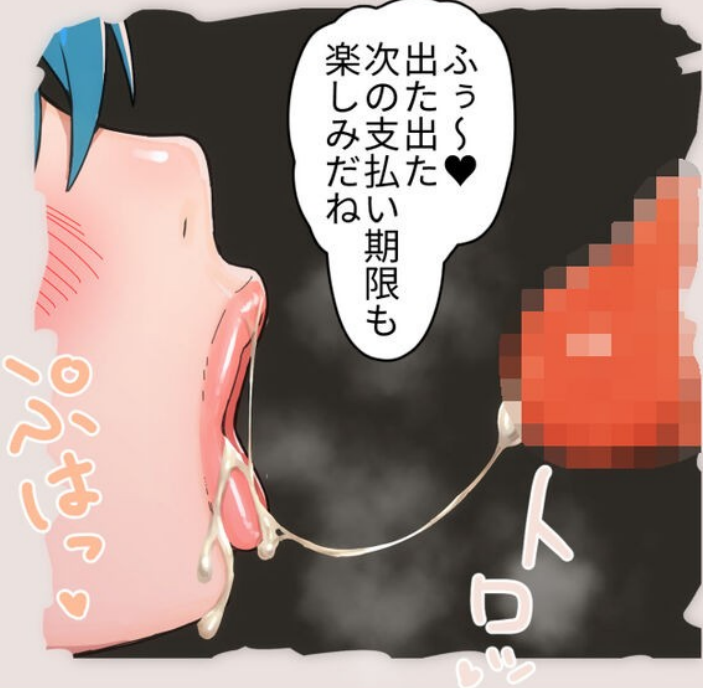
馬小屋の片隅でしゃが
まされる私の目の前で、
ただおじさまの腰から下
だけがリズムよく動いて
います。
そのまま、おじさまは
飽きるまで私の口を犯し
続け、最後は満足気な呻
き声とともに私の口の中
を粘ついた精液で満たし
た後、そそくさと去って
いきました。

仕方ないなあ
そのままじっと
しててね

そう
ちゃんと口を
すぼめて

ああ♡
エマちゃんの口ま○こ
最高だよ

ふう♡
出た出た
次の支払い期限も
楽しみだね



義兄様！
義兄様っ！！



だ、大丈夫
大したことは
ぐうっ

久しぶりの討伐クエスト。
ですがそこで義兄様が大きな怪我を
負ってしまったのです。

原因は私……。
あの事で上の空だった私をかばった
せいで魔物の角攻撃をまともに腕に受
け……。

さらに厄介なことに角には毒があり
解毒剤がないと義兄様は……。

義兄様を助けるために私が出来たことは、
宿屋のおじさまに『相談』する事だけでした。
条件は部屋の確保と解毒剤を買ってもらおう
事、それと引き換えに私は……。
すんなりと条件を飲んだおじさまは、すぐ
に義兄様を宿屋二階の部屋に移し、薬も手に
入れてくれました。

エマちゃん
脱ぐと
やっぱり



いいカラダ
してるね♡

そしてその日の夜にはもう、私はおじさま
の自室に呼ばれ……。
半裸にされ少し震えながら俯くしかない私。
体は汚されても心は永遠に義兄様のもの、
そんな風に当時の私は張り詰めた気持ちでべ
ッドの上に座っていました。

でも、私の体は……

あっ♡
だめえっ♡

初めてみたいだから
よくほぐさないからね
お、いい反応だ♡

ほら
ここか？ここが
いいんだろう？

私の心とは正反対で……。
義兄様への気持ちなんてまるで関
係ないかのように、おじさまの指で
気持ち良くなってしまう……。

私の中を散々に掻き回した後のおじさまの
指は、はしたないくらいに糸を引いて粘つい
ていました。
そして、その手をおじさまはからかう様に
私に見せつけます。

エマちゃんって
清楚ですらって
顔してる癖に

そ、そんな事……

意外と
ドスケベ
なんだね♡

初めてなのにこんなに……。
羞恥で頬を染めながらも、おじさまの言葉
通り私の体はすでに、おじさまの大きく勃起
したモノを受け入れる準備ができてしまっ
たのです。

だから、おじさまに初めて貫かれた時も恐怖や痛みを感じるどころかむしろ、声を抑えないといけけない程でした。仕方なく抱かれていますだけなのに、どうしてこんなに……。優しくこじ開ける様におじさまの肉棒が入ってきて……。義兄様に捧げるはずだった私の純潔はあっさり散らされました。

じゃあエマちゃん入れるよ♡

もうヌルヌルですんなり挿入っちゃうねえ

嘘……こんなに感じちゃうなんて……♡

おじさまはゆっくりと体を揺らしながら興奮した様子で私の体を褒めます。

初めてなのにエマちゃんのみま♡

ち○ぽにねっとり吸いついてきてるよ♡

昔、村の神官様にも言われた通りやはり私のカラダは罪深いのでしうか。

その後にはもう言われるがままに、ずんずんと体の奥まで響くおじさまの性欲を、ただ何度も受け止めるだけ……。

普段の人の好きそうな宿屋の主人の顔とはまるで違った表情で、私の乳房に吸いつき弄ぶおじさま。

そのたびに漏れる私の吐息を、楽しむように何度も何度も……。あの夜の事は途中からよく覚えていません。

でも正直に言うと、とても感じてしまっていたのは事実です。



感謝しないとなね
アルサス君の
おかげで

このエロ乳も
全部独り占め
できるんだから

イクぞエマちゃん
新人ま〇こで全部
受け止めるっ♡

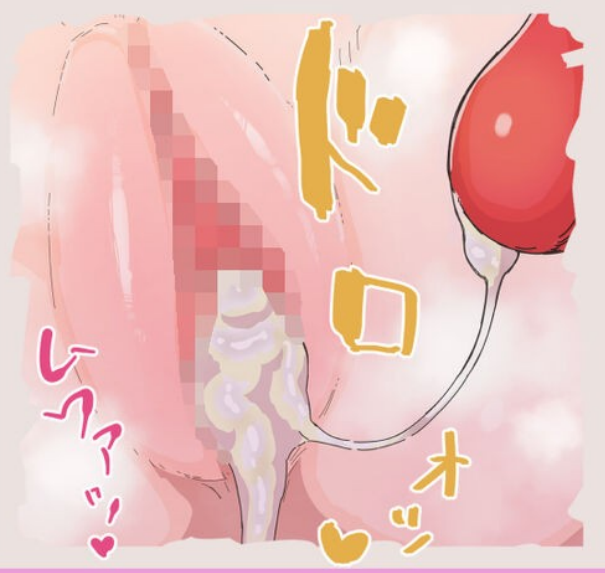


最後のおじさまの激しい動きで頭が真っ白になってしまった……。あれが私の初イキだったのでしょう。

最中は気づけなかったのですが、おじさまは私の中に何度も出していたようでした。

当時の私は泣きそうなお顔でおじさまに抗議しましたが、おじさまにはぐらかされ……。

結局それ以降もおじさまには中に出されてばかりで……。



いや〜アルサス君
ありがとうね
エマちゃんのデカ乳
最高だよ♥



それから、私とおじさま
の関係は続きます。
私が付きつきり、義兄様の
看病をしている間、おじさま
はよく部屋にやってきました。
私の義兄様への気持ちを知
っていたのか、おじさまは薬
で寝ている義兄様のすぐ隣で
奉仕させる事を好んでいまし
た。
特に私の胸が大変気に入っ
た様子で、毎晩のように義兄
様の側でおじさまに教えられ
たパイズリというご奉仕をさ
せられていました。

おじさまの顔を窺いなが
ら何度もやっていると、うち
段々とどういう風になれば
いいのか解ってきまして……
そのうちおじさまが射精
するまでの時間も短くなっ
ていったりして。
義兄様にも一度してあげ
たかったんですけど結局機
会がなくて、それが少し残
念ですね……。

見なよエマちゃんさあ
こんなパイズリ
上手になっちゃって♥



今じゃ言わなくても
ち○ぽを綺麗に
してくれるんだ



こんな風にね♥

最後は口をすぼめてお
じさまの出したばかりの
先っぽをゆっくりお掃除
してあげると、とっても
喜んでくれます。
いつものまにかおじさま
のおち○ぽをしゃぶるの
に抵抗が無くなっている
事に当時の私は特に気付
いていませんでした。
私のせい、で怪我を負っ
た義兄様のため、に一生懸
命だったのです。
そんな甲斐あって義兄
様の怪我は無事快復した
のですが……。

エマ、いるかい？
そろそろ出発するけど



ご、ごめんなさい
義兄様…
今日は私…

そうか…
いや、無理しなくて
いいよ

怪我から復帰した後、支
払いのために前にもまして
精力的に活動する義兄様。
私とおじさまの関係を、
義兄様は当然知りません。
そしてそんな義兄様とは
反対に、私がクエストに付
いていくことは減っていき
ました。
原因はおじさまです。
夜だけだった呼び出しも
むしろおじさまが部屋に來
るようになり、拳句義兄様
が呼びに來た時にわざと扉
の前で…。

実は今度
腕を買われて
パーティーに
誘ってもらえたんだ



お、おめでとう
ございっ…ます

そこでこれから
頑張って
稼いでくるよ
もうエマに
苦労をかけないで
すむと思う

私こそ、んっ…
足を引っ張って
ばかりで

いや、そんなことはない！
エマが付いてきてくれたから
僕は…
それにずっと前から…

義兄様はその時、ちやんとしたパーティーに誘われていた様です。
そうなれば勿論、宿代諸々の問題は一気に解決するので嬉しい報告なのですが、当時の私は背後で腰を振るおじさまのせいで、あまり話が頭に入ってこず…。
その後何かを言いかけていた気もするのですが結局曖昧なまま、義兄様は出ていかれました。

いや…この話をもっと一流の冒険者になつてからするよ…
…じゃあエマ、行つてくる



い、いつてらっひゃい
義兄…様…んっ♡

安定したパーティーに加入した義兄様はそれから、冒険者としてすぐに名を上げ多忙になっていきました。

街に一人残る私を心配した義兄様の伝手で、私もこの街の神殿に勤める事が決まり……。

そうなればもうこの宿を離れる事になります。

おじさまと会う事も無くなるでしょう。

だからおじさまは最後に私にお願いをしてきたのです。

ほらエマちゃん
僕が贈った下着
見せてごらん

こ、こ
うですか？

いいよね？
最後に一回だけ♡

そんな……
だめ……んっ♡

薄暗い馬小屋で新しい神官服を着ておじさまの前に立ち、プレゼントされた下着を付け、言われるままにポーズをとったりして……。

何もしないと言っていたのに、おじさまは私の唇を強引に奪い……。

荒々しく揉みつぶされる乳房とお腹に押し付けられたおじさまの大きな肉棒の感触に私の体の力が抜けていつてしまいます。

結局そのまま人気の無い馬小屋の片隅で私は、おじさまの愛撫を黙って受け入れ続けました。



おじさま
こんな所で……っ♡
誰か来ちゃうかも

大丈夫さ
今は皆冒険に行ってる
エマちゃんの大好きな
アルサス君もね♡



あとはもう、興奮したおじさまを止められずに
足を抱えられその場で……。
おじさまの言葉通り義兄様は朝、宿を発ちまし
た。

見送りの時私は、慈愛神の神官が祝福するよう
に義兄様の両手をぎゅっと握って無事を祈ります。
すると義兄様は珍しく顔を真っ赤にされていま
した。

そんな義兄様を私は幼い頃からとても大切に想
っています。

でもその大切な人の留守の間におじさまに身を
委ねてしまっている私。

私の胸に浮かんだそんな仄暗い罪悪感はでも、
体に刻み付けるようなおじさまの執拗な責めでか
き消されていきました。

いつのまにか私の体はおじさま専用の
雌のカラダに変えられてしまっていたの
でしようか。
義兄様を裏切るようなこんな事……。
いけないとわかっていても、もうどう
する事もできませんでした。

そう思うと
アルサス君には
悪いことしてるなあ
せっかく命がけで
魔物倒してるのに

その間エマちゃんは
おじさんち○ぽに
夢中になってしまっ
てるんだからね♡



こんな風に一番奥までち○ぽ届かされて

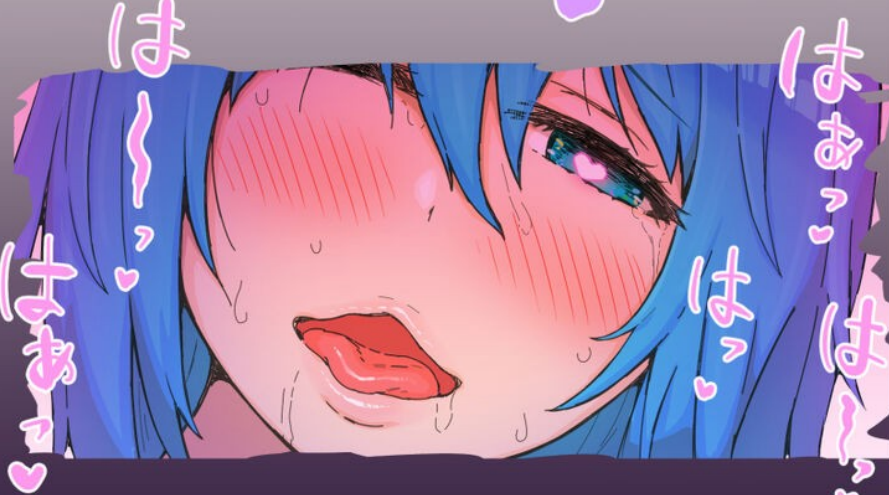
エマちゃんのドスケベま○こも嬉しそうに締め付けてるよ♥

離れられないようにちやくんとマーキングしてあげるからねっ♥

がっちり抱きかかえられ、力強く下から突き上げられる私。馬小屋の中で汗だくのままだ、貪るようにお互いの体をぶつけ合います。おじさま以外を知らない、おじさまの形にされた、おじさま専用の私のナカをみっちり塞ぐ雄の形。粘膜の中で幾度も擦り合わされる無限の快感に、気付けば私は体を震わせ夢中で叫んでいました。

ほらいけっ♥お前の体が誰のものなのか教えてやるっ!!

ごめんなさい義兄様……。でも……。これで最後、なんです。神殿に行けばおじさまと逢う事は……、



もう二度と無いのですから……。



いけない、もうこんな時間。少し回想にひたりすぎた様です。明日には返ってくるかと義兄様の手紙には書かれていました。何やら大事な話があるとも。ひよつとしたら、私を迎えに来てくれるのかもしれない、なんて。義兄様は約束を守る人ですから。でも私は、義兄様に謝らなければいけません……。義兄様と離れている間、私は真面目に神官として働いていました。でも休みの日はあの宿屋に呼び出されて一日中……。そうです、結局私はおじさまとの関係が続けてしまっているのです。私の想い人は今も義兄様只一人。でも私のカラダは……。ダメだとわかっていても、おじさまのおち○ぽには逆らえませんでした……。

そして今日も私は、



あの馬小屋で、おじさまに……

第一章
義妹と宿屋の
おじさま編
（終）



第二章
彼女と冒険者の編



坂を下ると小さな家が見えてくる。

あそこが俺の実家だ。

冒険者になってもう何年も経つが、山間の村に変化はない。

ここを出た時の俺といえば村の狩人に毛が生えた様なもんだったが、今では中堅冒険者として活躍している。

『森の影矢』こと弓使いコータの名はこの辺のギルドじゃ結構知られている筈だ。

久々に戻った俺を母ちゃんは喧しく出迎えた。

妹のミイコも元気だろうか。

母ちゃんによればこつちに戻ってきて以来、半ば引きこもっているらしい。

そんな妹の様子を見ようと二階への階段を上がる。

「おい、帰ってきたぞ」

声をかけると妹の部屋から小さな声で返事がした。

妹は以前、冒険者になると言っって街に出てきた事がある。

俺と妹は小さい頃から仲が良く、俺の真似をするように冒険者に憧れたのだろう。

そこで色々あって、妹は結局実家に戻ってきたと言う訳だ。

まあその件については俺にも原因があるのだが……。

少し苦々しいその記憶が俺の頭の中に甦ってきた……。

弓使い
コータ



冒険者になってなんとか初心者を抜け出せたか、最初の時期だったか、妹のミイコが後を追う様に冒険者になりたいといっって街に出て来たのだ。両親も俺と一緒にという条件で許可したらいい。こちらとてそんなに余裕のある時期でもなかったのだが、可愛い妹のためだ。俺は面倒を見ることに決めた。

弓使い見習い
ミイコ



「やっぱりお前も弓使い志望なのか……」
俺達は村の狩人である親父に弓を教わっていたから当然ではあるのだが……。
「ていうかミイコ、お前武器とかは？」
「え？買ってないよ。お金無いからににのお古でも貰おうかなって」
「そ、そうか。まあ無いこともないけど……」
「そうだ、にいにパーティー組んでる？イケメンの吟遊詩人さんとかいない？」
あの時はまだ、昔から変わっていない無邪気な妹に苦笑いするくらいだった。今思えば妹のそんな雰囲気も後の原因につながっていたのかも知れない……。



さて妹とパーティーを組むにあたって幾つか問題があった。前述の通り俺と妹は弓使いでかぶっていたので一人くらいは前衛が欲しい。さらに二人のレベル差もあるので妹に合わせなければいけないのだ。俺が普段潜るダンジョンは妹にはまだ危険すぎるし……。つまり、妹と同じ程度のレベルの新人かつ前衛職を探さなければいけないという訳で。本当は、可愛くて清纯で胸が大きい神官の子がベストなのだが。とにかく妹と一緒に組むのだから、変な奴は弾かないとな。当時の俺はそんな意気込みでギルドに向かったのだ……。

戦士見習い
リュウ



「ちっす」
……まあ結局、このリュウとかいうチャラそうな戦士見習いと組むことになってしまった。
「オレ新人だけど、結構地元で伝説作ってたタイプなんで」
「あはは、なんか面白そう」
「はは……」
能天気な笑う妹の隣で少し不安になる俺。
とにかく妹（とついでにこいつも）を育ててちゃんとした冒険者にしてやらないとな、とその時はそんな風に意気込んでいたもんだ。

後から思えば、そんな俺のやる気は完全に空回っていたように……。

三人で結成したパーティーだったけど、新人二人を抱えての立ち回りは俺も初めての経験で中々に大変だった。

お察しの通り新人達は、やはり少し冒険者稼業を舐めている所があり、それがクエスト中の危なっかしさに繋がっていた。

当然俺も度々注意したりと厳しめに接していたのだが……。

ある日つい言いすぎて妹と喧嘩になってしまったのである。



結局妹の機嫌が直るまで二日程かかったんだっただか。

その時はリュウも間に入ってくれて、なんとかなったけど……。

妹も少しづつ同レベルかつ同年代のリュウと仲良くなっているのだろう。あまり仲良くなられても困るけどな。

ま、妹は面食いらしいから大丈夫だろう。

……そんな事がありつつも、今までソロでの活動が多かった俺は、このまだ未熟なパーティーでの冒険を結構楽しんでいたのであった。



その件以来、少しずつリュウとも他愛もない事を話すようになった。陽キャっぽいので距離を詰めるのも早い。ちよいちよいタメ口になるのはイラツとするけどな。ただ妹がいない時とかはそこそこ女絡みの話をしてくる事があった……。

「先輩って、彼女とかいないんすか？」

「え……、まあ、今はいないかな」

「え、じゃあ……」

そのまま続くリュウの質問にあいまいに応えていく。

「……今はちよつと冒険に集中したいかなって。村にいた時は色々あったんだけどね」

見栄張って嘘をつく俺。

村でも冒険者になってから

も彼女がいたことは無い……。

「あ、じゃあ俺と一緒にすね。

俺も地元で人妻とか食いまくってましたもん」



リュウ君ダメだって♡

いいじゃん俺たち付き合ってるんだし

……コイツ意外とモてるのか？
今度から妹と二人きりにさせないようにならなくと。

「まあ、冒険者やってる女もたいがいチヨロいんでわりと簡単にイケますけどね」

「へ、へえ」

「オレまだ冒険者デビューして半年も経ってないですけど、結構な数やりましたよ」
どや顔で鼻を膨らますリュウ。

え、これが今から
オトナにされちゃう
ミイコの処女ま〇こ
です♥

もう
やめてよお
恥ずかしいって



そのままリュウのがつつり下ネ
夕自慢は続いていく。

「そんなモテるんだ……」

「いくつかタイミンダあるんよ、
クエスト後の打ち上げとか、あと
は失敗して落ち込んでる時も狙い
目で」

だが俺は内心、そんな得意げな
リュウを醒めた目で見ていた。

「冒険者なりたての子ってわりと
そっちも初めてってのも多くて」
どうせ話を盛ってるに違いない、
と。

こいつよりどう考えても俺の方がイケメンだけど、
打ち上げの後とかにそんな話一回もないしな。
「普段はけっこうスツゲー雌の顔なったりしてさあ」
「コイツのこういう系の自慢話は話半分聞いてお
いた方がよさそうだ。」
ま、見栄張る気持ちはわかるけどね。
「一回ヤツただけでもう彼女面してきますよね」
「あゝあるある」
「適当に相槌を打つ俺。
え？ていうか、恋人だからHするもんなんじゃないの……」

えへへ
リュウ君と初めて
繋がっちゃったね♥



うん……♥
大丈夫
すっごく嬉しい



「ミイコ
お前のま〇こ
締めクツソいいな
たまんね」

「これ…
すごっ」

「だめえっ
いつちやうっ」

「いや〜オレ、人妻キラ
ーだけじゃなくて、処女
キラーのスキルも持って
んのかなあ？初めての子
でも皆気持ちよくさせち
やうんすよね〜」

「はは……」

「そんなスキルは勿論無
い。」

「そうこうしてるうちに
妹が合流し話はそこで終
わったのだが、見栄張っ
て嘘ついたせいかりユウ
はそれから度々そういう
う話を俺にくるよう
になってしまった。」

「今すれ違った魔法使い
めちや可愛くなかったす
か？でもああいう清楚な
子もクエスト終わった後
は、しれっと男のち〇ぽ
しゃぶってるんすけどね」

「そ、そうだな」

「パーティー内の彼氏と
かに教え込まれてめちや
めちや上手かったりする
んすよ」



「だってリュウ君の
弱い所全部
知ってるもん」

「そんなリュウの戯言を聞き流しながら
思わず妹の顔を思い浮かべてしまう。
あいつもそのうち冒険者の彼氏とか
作って、そういう事を……。
いやいや、あいつにはまだ早いだろ。
いうて全然子供っぽいしな、ははっ。」



「フェラ？」

「けっこう
得意でーす」

はいよくできました♥
つか最初はあんなに
嫌がってたのにな

ん：
リユウ君のなら
いいかなって♥



「つかオレあれ好きなんすよね。口に出して舌で見せてくるやつ」

話を続けるリユウ。

「最初は嫌がる子もいるんすけどそういう子だとおさら征服感あるっつか」

「やっぱ嫌がるのか……。なんとなく苦そうだな」

「先輩ほらあの子」

「今度はなんだよ」

「大人しそうな神官の女の子が彼氏っぽい戦士と歩いている。」

「あの子地味にめっちゃ爆乳っすよ」
……たしかに。

ゆったりとした神官服でも隠せないくらいに盛り上がる肉感……。
「あんなエロ乳でパイズリしてもらいて〜♥」
「おい、聞こえるって。いくぞ」
神官の子の隣にいる戦士の鋭い視線を避ける様にその場を離れる。

「お前気をつけろよ？睨まれてたぞ」
「いや〜すいません。オレ、癖でつい見ちゃうんすよ。女連れてるときにこれやっちゃって機嫌損ねたり〜みたいな事も結構あって」
反省してる感ゼロだった。
こいつは逆に大物になるかもしれん。
いやでもこんなのをもし妹が連れてきたとしても絶対反対するけどな俺は。

ねえ：
今日さあ
胸のおっきい子
見てたでしょ





見てねーって
それにお前の方が
ぜってー可愛いし

そ：
そうかな

ほんとほんと♥
：じゃーそろそろ
出すぞっ：うっ

ちよっとお
出しすぎだよ♥
髪につきがちだった
じゃん

「その後なだめるの大変でしたよ。ほんとめんどくさいんすよね」
リュウの話はまだ続いている。
「まあそんなヤキモチ妬きな所もかわいいんすけど」
完全に惚気である。
「とうか今付き合ってる子の話なのか？
はあ…、羨ましい。
なんでこんないい加減な奴がモテるんだろ
う。この前も遅刻してきたのに…。
そうだ、この際だし一応注意しとくか。
「浮かれるのもいいけどお前、最近ちよっと
遅刻多いぞ。他のパーティーと組むときとか
にそれやるとガチで干されたりするから気を
つけろよ？」
「あり、へへ、サーセンした」
軽く頭を下げるリュウ。
俺もそれ以上は言わなかった。
…今にして思えばその時の俺は完全にピエ
ロだった。
何も気付かずになだ、あいつらを一人前の
冒険者にしようと頑張っていたんだ…。



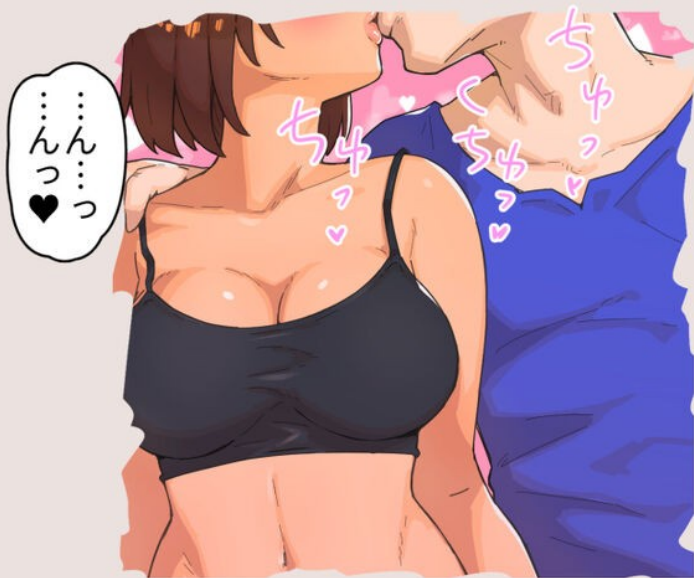
「お前らなあ、最近ちよつとたるんでんじやないか？」
酒場の片隅のテーブルを俺はドンと叩く。
「今日も二人揃って遅刻だろ？さすがに俺も頭に来てるんだぞ。前にも注意したよなあ」
激怒する俺の前でふくれっ面の妹に、よくわからん表情のリュウ。
「冒険者に何が大切かつつたらなあ、信頼なんだよ！パーティー組んだ仲間との絆があ……」
冒険者を舐めてるこの二人に、この機会にビシツと言って引き締めておこう、そんな思いで俺の説教はヒートアップしていくのだった。

「……まあとにかく今日と明日はクエスト無しだ。こんな状態じゃまともに戦えないからな。二人とも部屋でよく反省しておけよ」
そう言い捨てて俺は、足音荒く階段を上がり部屋へと戻っていったのだった。





昨日の怒りが覚めやらない俺は武器屋にでも行こうと一旦外に出たのだが、財布を忘れたので仕方なく部屋に戻っていた。「はあ、何してんだ俺……」何となく行く気が削がれて、そのままベッドに横になる。そんな時に不意に聞こえてくる話し声。
隣の妹の部屋からだ。
安宿の壁は薄い。
相手の声は……リユウか？
俺は思わず聞き耳を立てる。



「いに、まだ怒ってたね……」
「別にあるこまでキレることなくね？」
「案の定俺への文句を言い合っている。」
「ちよつと……、だめだよに隣部屋に居るから」
「大丈夫だって。ちよつと前に出かけたの見えたし。だから、な？」
「そうか、あつちは俺が部屋に戻ってるの知らないんだな。そのまま壁の向こうで会話が途絶える。」
「……というかまさか。」
再度言うが安宿の壁は薄い。
妹のか細い吐息まで聞こえる。
……こいつらひよつとして。



つるかみイコ
お前がさあ毎晩
誘ってくっから

朝までハメまくって
起きれなく
なるんじゃない

お前の兄貴も
キレ過ぎだしさあ

あゝ
思い出したら
ムカついてきた



(お、お前ら、つきあってたのかよ。一体
いつの間に……)
面食いつて自分で言ったくせにまさか
リュウみみたいな奴と付き合うとは。
今すぐにでも止めに行きたいくらい
の気持ちだが、まるで隣で盗み聞きして
みたいになりそうなので動けない。
……いや、後から思えば、実際動けたと
しても俺にはあの空気の中に割って入るこ
とはできなかっただろう。

今日はアイツの妹のお前を
一日中パコパコの刑に
処す♥

その時の俺は弓使いスキルの『気配遮断』
を使ってまで、じっとしているしか選択肢が
なかったのだ……。
……気配を殺す俺の耳には、予想以上に親密
な二人の会話が嫌でも入ってくる。
……というか遅刻の理由それかよ……。
兄として知りたくなかった事実。
激しく軋むベッドと初めて聞く妹の甲高い
喘ぎ声が混ざり合う。
え、そもそも今日は休みじゃなくて反省期
間のはずなんだが……。
一日中パコパコする日じゃないんだが。
そんな俺の心の声は届くはずもなく、隣の
ギシアンは隙を見て抜け出すまで続いた……。

……あつあつ
しゅごっつ♥♥
奥まで……んっ♥♥
届いちやってるう♥♥





「いつからだ？」

「え？」

「妹とお前、いつから付き合ってたんだ」
「あ、ついにはバレちゃいました？つかいつからだっけな。ああ、前に先輩とミイコがケンカしてたじゃないすか。それを慰めてるうちにそっから仲良くなってみたいな感じっす」
（あの時か。え、じゃあ俺が思いつきりアシストしてないかこれ？）



…ねえそろそろ戻らないと戻らないと♡♡



待たせとこうぜ どうせあいつ何も言えねえし

「ミイコも初彼氏みたいで。オレがあいつの初めてを全部もらったみたいだ。額が血管がひきつる感覚。」

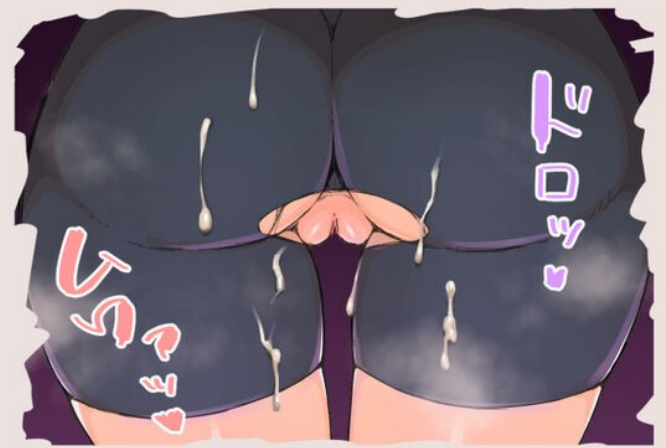
「お、お前あんまり調子に……」

「そうだ、ミイコから聞きましたよ。村で全然モテてなかったって。こっちでもあんまり女とつるんでるの見たことないし、先輩ってひよつとしてまだ童貞とかっすか(笑)」

「……全然違うけど？」

「はは、そっすか。ま、オレとミイコの事は大人しく見守っててくださいよ」

「それからというものは、クエスト中もお構いなしにあいつらは露骨に二人で消えるようになった。」

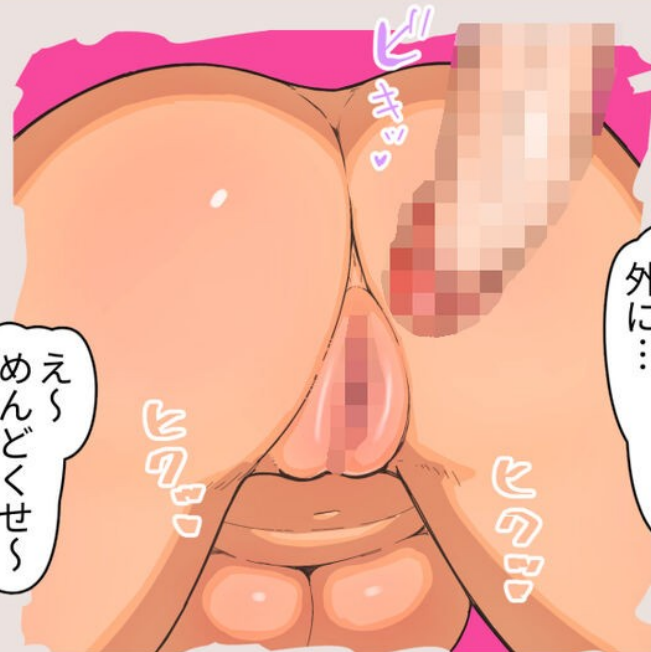


この前なんか二人が見回りから帰ってきたら妹が妙に焦ってて、もう露骨に事後みたいな空気を出しやがって。
しかし俺も男女の事は口出ししにくく、最近は完全に舐められている事にも気付いていた……。

「お前さあ、アイツはやめといた方が良くないか……」
妹のためを思って俺は忠告することにした。
「え、リュウ君の事？なんでもいかにそんな事言われないといけないの」
「いやアイツはだって……、不真面目ですぐサボるし……。冒険者としてもこれからさあ……」



「リュウ君はそんな人じゃないもん。すぐ他の女の子見てたり、怒りっぽい所もあるけどその後は優しくしてくれるし……」
俺の説得は実らず結局妹を怒らせる結果になってしまった。
そんな色々な事があったせいか、当てつけの様にアイツらは隣の妹の部屋で俺に憚ることなくやりだすようになってしまった。



ねえ、今日は
危ない日だから
外に…

ええ
めんどくせえ

…妹は今は活発で明る
い奴だが、昔はちよつと
体が弱くてすぐに風邪を
ひくような子だった。
よく森に入ってた妹のた
めに薬草を摘んだものだ。
昔から俺について回っ
て、にいにいってう
つとうしかつた時期もあ
ったつけ。



で、でも
もし赤ちゃん
出来ちゃったら

いーじゃん別に
中出ししても

あいつが森で迷子になっ
た時も、俺が必死で探し
て見つけて…。
泣きつかれて動けない
妹を背負って獣から走っ
て逃げたのも、今となっ
てはいい思い出だ。



構わねーよ
お前の兄貴に
聞かれながら
このまま

本気種付け
ピストンで
孕ませてやんよ♥

…うん♥

隣の部屋で妹と彼氏がイ
チャラブエッチしまくって
いるという最悪な状況のせ
いで、思わず現実逃避して
思い出に浸る俺。

そんな中でアイツはなんと妹に中出しをせがんでいる。
いや中はマズいだろ
.....
デキたらどうすんだよ。
しかし一応は拒否しつつもあっさりとは押し切られる妹。



はぁはぁ... やぁんっ♡
激しいっ♡
リュウ君のおち〇ぽが
気持ちいいトコロ
に当たって...っ♡
はぁはぁ...
そろそろ
射精すぞっ

いいよっ♡
きてっ♡
私のナカに
出してえっ♡



あゝあぁんっ♡
イクっイクううっ♡
はぁっ... あぁっぁんっ♡

.....や、やめろおつ。
俺が心の中で制止する
のも空しく、妹は完全に
雌の声になっていた。
ベッドの軋みが最高潮
に達した後、甘い静寂が
訪れる。
ようやく終わりを迎えた
この状況に俺は聞こえない
程度に息を大きく吐
き出したのだった.....



あぁん...♡
危険日ま〇こに
リュウ君の精子が

んっ♡
...んんっ♡
やだ...♡
私のナカで

リュウ君のおち〇ぽ、
また大きくなって...♡

あ、これまだ続きそう
ですね.....

いっぱい
ピュッピュされ
ちゅってう...♡



——で少々トラブルを起こした挙句、今は実家に戻っていると。

「なんだ、あんまり変わってないな」

久々にあった妹は、意外とまともな感じだった。

てつきり髪ボサボサでデブってるんじゃないかと思っていた。

「にいにこそ相変わらず彼女いないの？」

「……まあ今は、な」

実はここに来る途中に寄った神殿の神官さんは多分、俺に惚れてると思う。

治療の時、目を見ながら手をぎゅっと握ってニコッと微笑んでくれたからな。

そう言うのと妹は冷めた目で言い返す。

「慈愛神系の神官さんは皆それやっていると
思うけど……。それにそういう清楚な神官の子程、おじさんと爛れた関係持ってるんだって」

ははは、まさかそんな訳……。

……そんな他愛もない会話の後、俺は母ちやんから頼まれていた話題を切り出す。

「ミイコお前、前みたいにもっかい俺と冒険者やるか？」

「んー、どうしよっかなー。……でも、それもいいかもね。よーし、今度こそイケメンの彼氏見つけよっ♪」

……懲りない奴だ。

俺は呆れつつも少し元気が戻ったように見える妹の頭をポンと叩いたのだった。

第二章
妹と冒険者の
彼氏編
（終）

冒険者 寝取られ 体験談

著者：しゅにく2
Twitter:@syuniku2

無断転載及び18歳未満の方の
閲覧・購入を禁止します。

